

テイと小規模特養(ユニット型)10・65㎡、小規模多機能とグループホームは7・43㎡。これに対して、東京都認知症デイサービス活用事業は宿泊に必要な設備として、「専用の居室を設

けることを要しない。テイのスペース(食堂と機能訓練室、合わせて3㎡)でも「スプリングクラーの設置」とされる。以上6サービスは、主に社会福祉法人が設置運営する小規模特養とショートステイ、居住系サービスとして実施されるグループホームと小規模特定施設、在宅サービスの小規模多機能型居宅介護、そしてお泊まりテイの4群に分けることが

できる。共通する点は、制度上あるいは事実上、これらのサービスを受給するのと、医療系を除いて、他の介護保険サービスをほとんど受けることがなくなる。こうしたサービスの囲い込

ラシステム上、スプリングラー等の防火設備の導入には大家の了解が必要となる。それは茶話本舗の大きなネックと言えよう。「ハードを導入することが大切ではなく、失火を起こさないオペレーションを徹底させている」と同氏は言うが、実は「お泊りテイ」の制度化が実現されるとこの点が最大のハードルになりかねないのだ。

茶話本舗(日本介護福祉グループ)

お泊まりテイの制度化肯定

「当社の方針が国に受け入れられた」



社長 副社長 齊藤正行

同社は06年創業。事業所は借り上げた民家を改修することで初期のコストを削減。日中の利用者数は最大で10人、宿泊は5人、36

人、一般的な相場が500円〜700円といわれる昼食費は200円、朝・夕食でも400円に設定されている。

「800円の宿泊費では採算に全く合わないのは事実」と宿泊サービスの不採算性は齊藤副社長も率直に認める。ではなぜ茶話本舗のテイは運営が可能なのだろうか。齊藤副社長はこう続ける。「最大のポイント

「茶話本舗」のブランド名でデイサービスのブランドチャイズ(F.C)化を進める日本介護福祉グループ(本社墨田区、小柳社輔社長)は、800円という廉価で利用者の宿泊に応じている。「お泊まりテイ」制度化の流れについて同社の齊藤正行副社長の見解は「基本的には肯定的にとらえている。デイサービスにおける宿泊の提供は利用者

に本当に喜ばれている。制度化は当社のモデルを国や顧客が認めたということ」と感想を述べた。

「職員配置は日中が4人(2・5対1)、夜間が1人(5対1)と基準に比べ手厚い。そして目を引くのは利用者の自費負担の安さ。宿泊費の800円はもちろ

算を別々に考えず、トータルとしてみる。平均的な加盟事業所の稼働率は9割で、1カ月の収入は350万円。十分に採算に合う」と同氏は胸を張る。つまり茶話本舗はコストを抑制し、高い稼働率を前提として成り立つ事業所なのだ。

「制度の詳細が決まらない限り具体的な方針を立てられない」と齊藤社長。同社も国の動きをじっと注視している。

「お泊まりテイ」は「同氏。しかし防火設備の整備など物理的な基準には現在加盟している事業所の多くが対応困難と見られているのだ。